

正月風物詩 2

お正月は御座敷へ石臼の台で木の枝を建てて、団子や蜜柑を着けて繭玉飾りを作ったり、神棚には接骨の木で栗稈穂を作り、花と実に似せて五穀豊穡を御祈り致しました。昔は今と違って娯楽が少ないので、凧揚げや追羽根つき等が、若者達の唯一の楽しみでした。若い衆や娘達が大勢集まり、羽根を落とすと顔に墨を付けられます。

只今の西武信用の所に小作平さん、鍛冶屋さんがあり、牟礼のどんどん橋の兩岸には、海老沢鍛冶屋と車大工があり、お正月には、どちらでも韃祭りが行われ、其の時はたくさん蜜柑を投げるので、村中の子供達は喜んで拾いました。坂本屋雜穀店では、初荷を行い近郷の百姓達は荷車一杯に、大麦小麦を積んで売りに来ます。庭から前の道路の両側は俵の山となりました。荷馬車も何台も来ます。中には馬に、お面をかぶせたり、新らしい木綿の虻取りには当家の家紋の印を付け、首の両端には多さんの麻や、五色のめりんすの布を垂らし、腰には鈴をつけて鳴らし、馬方は、坂本屋商店庄印の伴天に粹な姿で馬力を曳く有様は、今でも目に浮かびます。麦を売りに来た人達は祝酒を御馳走になり、酔って夕方近くまで道路端に寝転んでいる者も居りました。

十五日は、歳の神と言ってお正月の夕飾りを各戸で集めて、広場に山積して燃す行事です。其の時、竹の先へ繭玉に用いた団子を挟んで焼いて食べました。その他「当てむき」と言って、一銭で一枚銭引が大当たりだと大きな駄菓子で出来た富士山を嬉ろこんで、貰った事もあります。

夏祭り 3

現在夏の七月二四日に行われている湯の花神楽は、むかし久我山部落に疫病が蔓延し、特に宮世話人の家族に多く順次氏子にまで広がり、村人は毎日稲荷神社に集まり、お百度を踏んだり祈願で社殿に立てこもりました。

ある日、祈願中神様の御告げで湯の花を以って村人を祓えとの御告げに依り、早速御告げに従い神前に神楽を舞い神社の庭に三脚に柱を建て、その上に大釜を載せて湯を沸かし神主が櫛の杖で釜の湯をかき混ぜてお祓いをいたしました。すると数日後には、今まで悩まされていた悪病は退散して元の平和な村になり、それ以降今日に至るまで続いています。

農家では畑の仕事も一段落し、総耕仕舞と言ってひと休みの時期に入ります。他村へお嫁に行った人達は子供を連れて里方へ帰れる一番楽しい時でもありました。今日ばかりは姑さんの御機嫌も取らず、親に甘えて足を延ばせてのんびり出来る時でした。

秋 祭 り 4

秋の田は黄金色の波が風吹く度にゆらぐ頃、久我山の秋祭が十月一日にあります。五年目毎の大祭には、村中挙げての大仕事になります。若い衆は、毎晩の様に寄り合いをして催し物の演題が決まると宮世話人の家へ行き頼みます。他の宮世話人は何回か足を運ぶと許可してくれますが、西の秦銀蔵叔父さんは中々首を縦に振ってくれませんでした。ようやく、芝居をやっても良いと言われると大変です。村中総掛かりで一週間位は舞台作りにかかります。

世田谷の松原に貸し舞台が有り、そこから牛車や大八車で運びます。大きな廻り舞台なので組立ても大変でした。祭り当日は近郷近在から多数集まり、親類縁者は御寄附を掛けてくれるのでお返しに餅や手拭等を贈りました。

演目は久我山では忠臣蔵に中幕は勧進帳等をよくやりました。二晩続けてやり、最後の討入の場面の時は、東の空が明るくなった時もあります。

現在のようにテレビ、ラジオ、映画等娯楽機関のない時代ですから秋の祭りは特に楽しみでした。